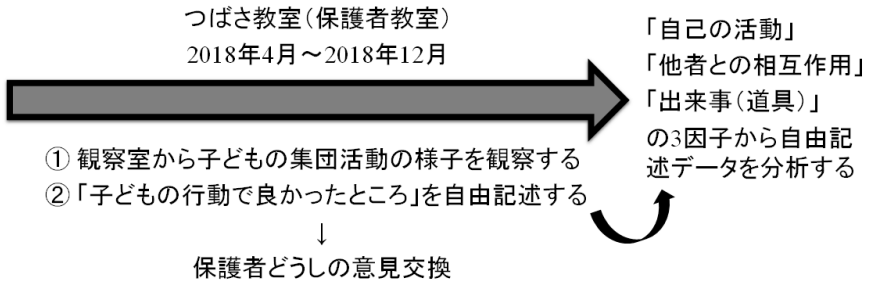
研 究 代 表 者	所属学系・職名　人間・生活学系・准教授 氏　　名　髙橋　純一
研　究　課　題	発達障害幼児をもつ保護者が子どもの行動を肯定的に捉えなおすプロセスの解明 Analysis of processes in permissive childrearing styles in parents who have a child with developmental disorders.
成 果 の 概 要	1.　目 的 子どもの養育においては，「子ども―保護者関係」の構築が必要である。特に，障害児をもつ多くの保護者では，子どもに対する不適切な養育スタイルを形成する傾向がある（齋藤・他, 2016）。不適切な養育スタイルは子どもとの関係を悪化させ, 結果的に子どもの問題行動が増加する懸念も指摘されている（昼田・他, 2008）。つまり，子どもへの直接的な介入や支援だけでなく，保護者への支援も必要である。保護者への支援として，保護者を対象に子どもの養育技術を獲得させる「ペアレント・トレーニング」がある（大隈・伊藤, 2005）。 発達障害児早期支援研究所は，グループ研究助成（平成 28・29 年度）を受け，ペアレント・トレーニングの実践的検討を進めてきた。結果から，子どもの行動を否定的に捉えがちであった保護者の養育スタイルが，ポジティブに（肯定的に捉えられるように）変化することを実証した（平成 28 年度）。また，保護者どうしの共感的支え合い（ペアレント・メンター）によっても養育スタイルの改善が認められた（平成 29 年度）。 発達障害児早期支援研究所では，一連の介入研究から，保護者に対する新規の介入法を提案した（髙橋・他, 2016）。しかし，介入前後の養育スタイルの変容（量的観点）は実証されたが，その変容過程（質的観点）は予備的検討にとどまっていた。髙橋・他（2016）で提案された介入法を頑健なものにするためには，介入前後の変化に加えて，その変容過程も明らかにする必要がある。そこで，本研究では，質的観点から，障害児をもつ保護者の養育スタイルの変容過程を明らかにする。  図 1. 本研究の概観 2.　方 法 **調査参加者**　福島大学発達障害児早期支援研究所において実施している「つばさ教室」に参加した子ども（4 歳～6 歳）の保護者 8 名（男性 1 名，女性 7 名；30 歳代～40 歳代）が対象であった。 **調査項目**　遊び場面観察における自由記述として，子どもたちの遊び（活動）場面を観察室から観察し，自由記述によって子どもの「良かった点」を箇条書きで記述してもらった。保護者教室では，記述内容をもとに話し合いが進められた。

成 果 の 概 要	3. 結果と考察 髙橋・他（2016）では，保護者の自由記述データから，子どもの行動を捉える指標として, テキストマイニングを用いた分析により, 3 つのクラスター (「自己の活動」，「他者との相互作用」，「出来事（道具）」）を抽出した。本研究では，髙橋・他（2016）で得られた 3 つのクラスターを指標として，保護者の自由記述における養育スタイルの変容について分析を行った。教室に参加した年数を考慮するため，継続参加の保護者（n = 4）および新規参加の保護者（n = 4）に分けて分析を行った。 ＜継続参加の保護者＞ 1 回目から，自分の子どもの活動に関する記述に加えて，“学生”や“先生”との関わりに関する記述が見られた。「自己の活動」および「他者との相互作用」が見られたと言える。“ゲーム”や“ルール”などの記述も見られたため，「出来事（道具）」に関しても，保護者の注意が向いていたと推測できる。 以上より，継続参加の保護者における特徴として，保護者の注意が「自己の活動」から「他者との相互作用」へ発展し，「出来事（道具）」を含んだ関係に発展したと推測する。 ＜新規参加の保護者＞ 継続参加の保護者に比べて記述量が少なかった。“机に落ち着いて座っていた”などの「自己の活動」に関する記述が中心である。5 回目から“学生さんとたくさん話していた”などの「他者との相互作用」に関する記述も見られ始めているが，全体的に少ない記述量であった。 新規参加の保護者については，髙橋・他（2016）でも指摘されているように，回数を経ることで，「自己の活動」から「他者との相互作用」へと保護者の注意が移行すると考えられる。 4. まとめ 本研究の目的は，障害児をもつ保護者の養育スタイルの変容過程を明らかにすることであった。髙橋・他（2016）が示した子どもの行動の捉え方に関する 3 つのクラスター（「自己の活動」,「他者との相互作用」,「出来事（道具）」）にもとづいて，保護者の自由記述データを分析した。結果から，教室に継続参加している保護者と新規参加の保護者では特徴が異なることがわかった。特に，継続参加の保護者では保護者の注意が「自己の活動」から「他者との相互作用」へ発展し，「出来事（道具）」を含んだ関係に発展しており，子どもを取り巻く環境に注意が向いていることが示唆される。一方で，新規参加の保護者では「自己の活動」から「他者との相互作用」へと保護者の注意が移行することがわかり，継続参加の保護者と比較して記述量が少なかった。教室への参加回数（年数）が保護者の養育スタイルのポジティブな方向への変容およびその維持に影響を及ぼす可能性が推測できる。 ※ 本報告書の内容は，髙橋・他（2018）において発表したものである。 5. 文 献 髙橋純一・鶴巻正子・大関彰久・村上つかさ（2018）保護者の障害理解が養育スタイルの変容に及ぼす影響，日本障害理解学会 2018 年度大会. 髙橋純一・遊佐千尋・鶴巻正子（2016）子どもの行動に対する肯定的捉え直しが発達障害幼児の保護者の養育スタイルに及ぼす影響，障害理解研究，17, 17-28.